

岡崎城跡菅生曲輪枡形発掘調査 現地説明会資料（H29.12.2）

岡崎市教育委員会

1. 発掘調査：平成 29 年 11 月 9 日～平成 29 年 12 月 22 日（予定）
2. 調査経緯：岡崎市教育委員会では「岡崎城跡整備基本計画 - 平成 28 年度改訂版 - 」（H29.3）に基づき、積極的に調査研究を進めている。この一環として、今回の発掘調査を実施中。

3. 虎口と枡形虎口

- ・虎口(こぐち)：中世以降の城郭における曲輪間の出入口のことで、「こぐち」には狭い道・狭い口という意味がある。虎口の平面形や構造などから様々な種類がある。
例) 喰違虎口、枡形虎口（内枡形、外枡形）馬出など
- ・枡形虎口：虎口前面に設けられた四角形の空間のことで、枡形内部の敵に対して枡形周囲の城壁や櫓等から横矢が掛かる構造となっている。枡形内で直角に通路を屈曲（右折または左折）させることで、進入した敵が容易に直進できない仕組みとなっている。

4. 絵図等に見る菅生曲輪枡形

- ・菅生曲輪枡形は菅生曲輪と切通しとの出入口にあたる。切通しを上行くと東曲輪や三の丸といったより主要な曲輪へと通じることから、重要な虎口であったと考えられる。
- ・切通しから菅生曲輪側へ方形の空間を張り出させている点で外枡形の一種であるが、最前の門のみで、後方（切通し側）には堀や門がないと考えられる。
- ・東曲輪にある東隅櫓が枡形や切通しを見下ろす位置にあり、重層的な防衛拠点となっている。

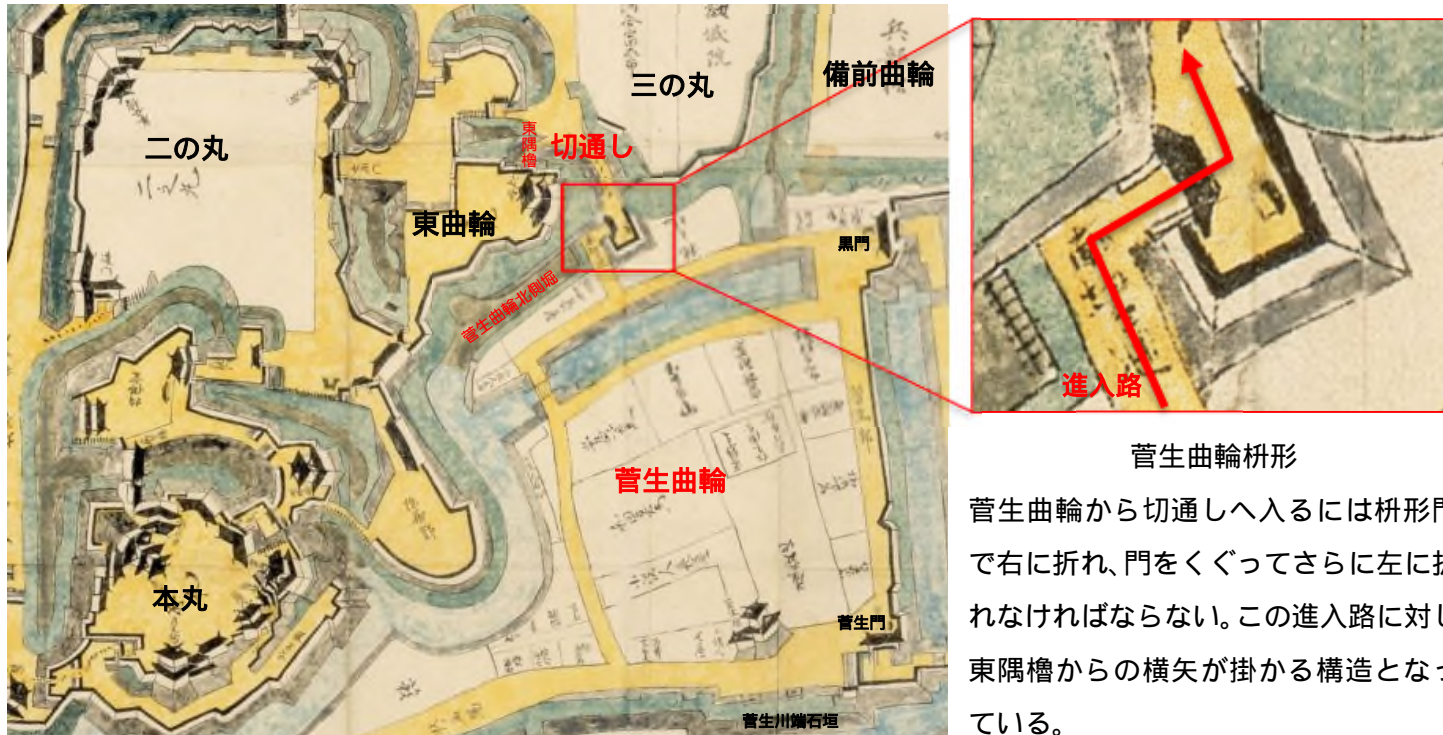


図1 岡崎城絵図（江戸時代後期）における菅生曲輪枡形及びその周辺

●前本多家時代（江戸時代初期）

城内道路が朱書きされた絵図によれば、虎口と考えられる「折れ」が確認できる。門と思われる表現もあり、江戸時代初めからすでに虎口を備えていたことが分かる（図2）。

●水野家時代（江戸時代前期～中期）

水野家時代の絵図には虎口に門が描かれる。東隅櫓から門に向け堀が描かれるものが数点確認できる

が、構造としては不明である（図3）。

また絵図によっては、後に触れる後本多家時代の絵図に描かれるような枡形構造が描かれるものもある。水野家は藩主時代が長く、絵図も複数面あり、絵図の年代が不明なものもあり、詳細な虎口形状の変遷は不明である。

●後本多家時代（江戸時代後期）

後本多家時代に描かれる虎口は枡形構造で描かれる。枡形は西面北寄りに門が位置し、西・南・東側に石垣及び上部に土堀が描かれる。切通し側（北側）には門や堀等の仕切りはない。枡形門をくぐった先には番所が描かれる（図4）。後本多家時代の絵図の表現は概ねこのような虎口形状で統一されている。

●文献資料に記載された枡形門

明和7年（1770）の「書上文書」（城主が松平から本多に交代した際の引継書）に切通しの門(枡形門)に関する記載がある。「一、南切通四ツ足門 横内法一間二尺三寸、梁行一間一尺、くぐり内法三尺五寸」とあり、現在の数値に換算すると間口(桁行)約2.51m、梁行約2.12m、潜り戸内法が約1.06mとなる。

5. 菅生曲輪枡形・切通し周辺の過去の調査成果概要

●平成12年度：菅生曲輪発掘調査

- ・菅生曲輪北側堀の南肩を確認し、枡形門前の道路西側で堀が収束することと、堀収束部に石垣が構築されていることを確認。
- ・枡形の南辺想定地も調査区内であるが、明確な痕跡は認められなかった。

●平成19年度：東曲輪南斜面地調査

- ・菅生曲輪北側堀の北側で堀石垣（東曲輪腰巻石垣）を天端から2.15mの深さまで確認。
- ・枡形門前の通路が北側で収束し、突き当たった正面の石垣と石垣前に石組溝（排水溝）を確認。石組溝は枡形門の北側をくぐり切通し側へと延びる。

- ・枡形門の北側の礎石を2石確認。礎石の大きさや配置、絵図の検討からは高麗門形式が想定される。

●平成26年度：枡形・切通し通路部

<枡形門>

- ・枡形門の南側礎石のうち控柱礎石を1石確認したが、本柱の礎石については確認できなかった。
- ・平成19年度で確認された礎石2石と合わせて考えられる枡形門の規模は礎石の中心間で計測すると、間口（桁行）4.3m、梁行2.4mとなり、「書上文書」に記載された数値とは一致しない。

<枡形>

- ・枡形の東側北端部の調査では溝を1条確認。枡形外周を囲う溝の可能性もあるが明確ではない。また



図2 前本多家時代



図3 水野家時代（1762 写し）



図4 後本多家時代

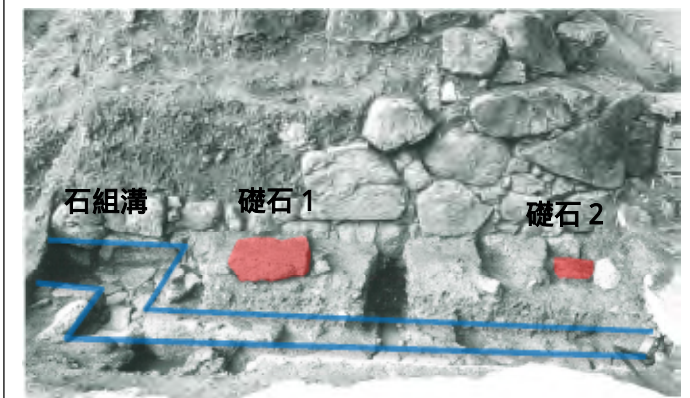


写真1 H19年度調査 枡形門礎石（南から）

溝の内側に枡形の基礎となる様な石垣や土塀の痕跡は確認されなかった。

<切通し>

- ・切通しの通路部分は現状では緩やかなスロープ状の傾斜となっているが、絵図で破線（階段）で表現されるように調査でも石段が確認された。石段は切通し中央部付近の調査区では6段分が確認された。
- ・切通しの東側石垣の下端沿いには石組溝が構築されているが、切通しが枡形付近にさしかかるあたりで切通しを横断し、平成19年度調査で確認された石組溝に至ることがわかった。
- 過去の調査まとめ
- ・枡形門の平面規模は礎石により想定が可能。
- ・門から延びる枡形の構造（石垣・土塀等）を示す明確な痕跡は確認されていない。
- ・切通しの石段、石組溝を確認。石組溝は枡形門礎石北側の内側から門前道路北側に延び、菅生曲輪北側堀に突き当たる。
- ・菅生曲輪北側堀石垣を確認。堀幅は収束部付近で約9.3m、深さは最大で2.15mまで確認。

6. 今回の発掘調査成果

【発掘調査の目的】

過去の調査で確認されていない枡形の構造（石垣・土塀等）の痕跡を確認すること調査区1

枡形門前の道路の状況と菅生曲輪北側堀の収束部の石垣高さ（堀深さ）を確認すること調査区2

【調査区1】

枡形想定範囲のうち、枡形東辺の未調査部分に調査区を設定した。平成26年度調査で確認された溝が枡形の外周である可能性があるため、この溝の想定延長までを含む範囲を調査区とした。

調査区北東部で近世後期の土坑状の遺構を確認したが、平成26年度調査で確認した溝の延長部であるかは不明。溝延長部であった場合、ここで収束しており枡形外周を囲うものではないことになる。またこの遺構の南側に溝状の遺構を確認した。これは平成12年度の調査でも確認された

遺構の続きであり、当時の調査ではこの溝の立ち上がりが明確に捉えられておらず、幅や遺構の性格については不明。現状では東に湾曲して調査区外へ延びることから、これも枡形に伴う遺構とは言い難い。

仮に枡形が絵図に描かれるような石垣基礎上に土塀を構築するのであれば、石垣の残欠や石材を抜き取った際に残る痕跡がないかと考え精査したが、そうした痕跡は見当たらなかった。なお、これまでの調査で枡形門の礎石を標高16.0m付近で確認しており、今回の遺構検出も同レベルで行っているため、枡形基礎部分が後世の大規模な攪乱を受けたために痕跡が失われたとも考え難い。



写真2 H26年度調査 枡形・切通し（南から）

【調査区2】

道路遺構の表層は明褐色土が硬化した面で、その範囲は枡形門前から堀石垣の手前2.0m付近まで広がっていることが確認された。道路遺構としては、表層の硬化面の下に2層の薄い整地層が確認され道路構築時の地業（基礎工事）の状況が分かる。

堀石垣は過去の調査で確認されていない最下部（根石や胴木の有無等）を確認することを目的とし、石垣高さ2.0m付近まで確認したが、湧水により調査が困難であり最下部は未確認である。



写真4 調査区2 菅生曲輪北側堀石垣（西から）



写真5 調査区2 道路遺構断面（西から）

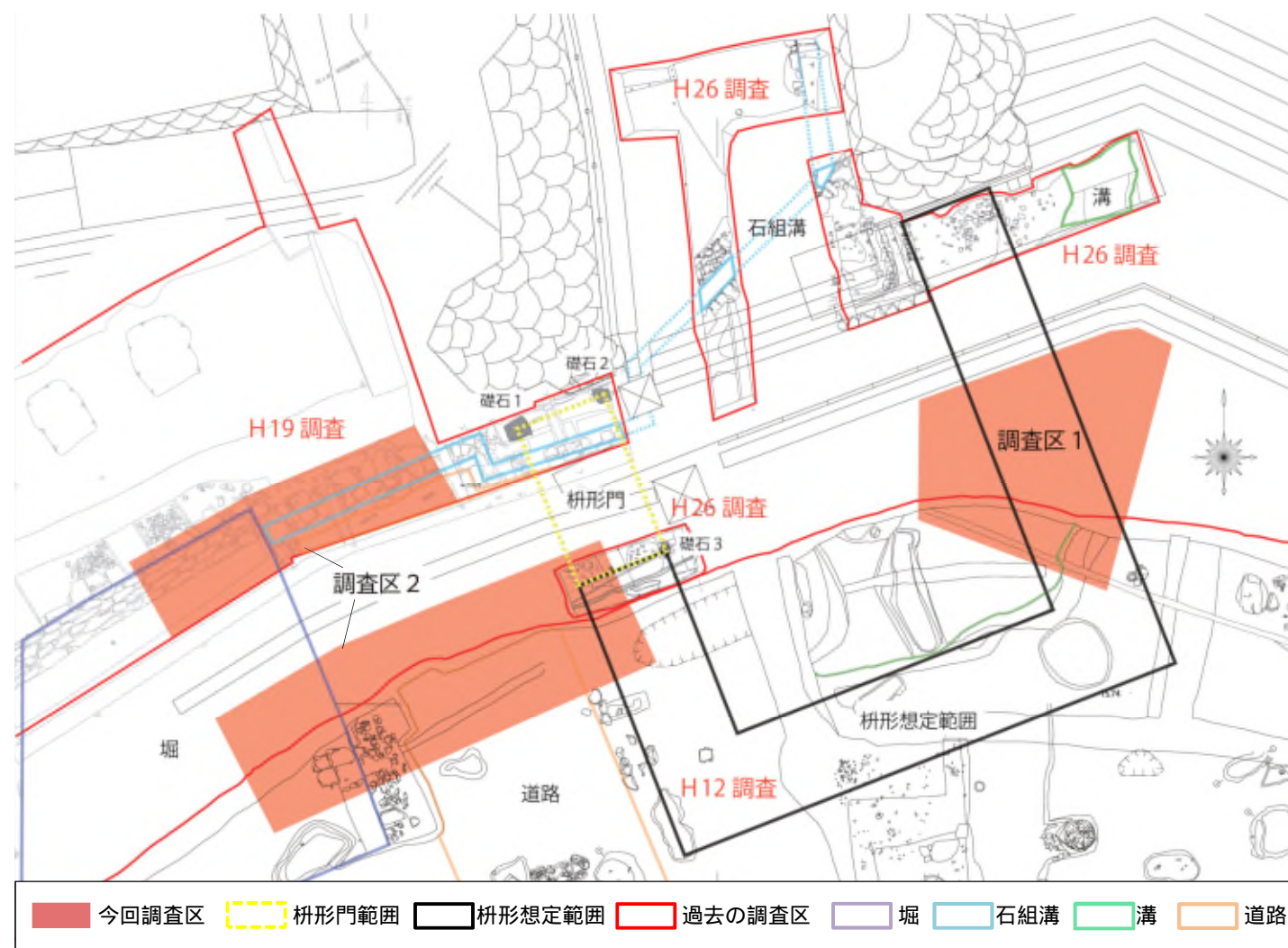


図5 過去の発掘調査平面図と今回の調査区位置図